作物別技術交流集会報告

お米

らでぃっしゅぼーや(株)農産部仕入課　武居 徹

作物別技術交流集会の中でも最多の回数を数える「お米」は今回で9回目。6月28・29日、山形県北部の日本海側、鳥海山を望む飽海郡遊佐町(あくみぐんゆざまち)にて行なわれた。幹事生産者は遊農くらぶ。代表の尾形修一郎さん、なつさんご夫妻をはじめとする4名のお米生産者。今回のテーマは、昨秋尾形さんが施した藁処理の効果(※)がどのように現れているか、の検証だ。

Report

会議の序盤、らでぃっしゅぼーやからの連絡がなされた。除草剤について「Radix環境保全型生産基準要項の水田稲作編　第二節～資材～」でうたわれている魚毒性は、Aタイプを容認しているが現状でB類を使用している生産者は、A類への変更を、また制限→禁止へ移行された農薬の注意、カドミウムの濃度分析を行なうこと、などの説明を行なった。

■目を見張る結果に

この後は、各生産者の土作りの方法を発表。田んぼから沸く硫化水素の対策はみな様々。青森・斎藤博さんや新潟・潟東ゆうきくらぶの武田金栄(かなえ)さんは藁の分解に菌を使用している。他の多くの方は田んぼを中耕しガスを物理的に排除する方法が多い様子。最後に尾形さんからは、「以前は硫化水素が発生し根が赤くてもこれが普通だと思っていた」とのこと。昨年のらでぃっしゅぼーや生産者の根の写真を上映したが、尾形さんの根は言葉どおり赤くなっていた。

その晩遅くまでの勉強のしすぎ(飲みすぎ?)で皆さん寝不足の中、早朝から尾形さんの圃場を見学。昨年は下葉がだらしなく垂れ下がっていたものがあったが、今年は稲の葉がスッと伸びており、固さもある。一目見ただけでも違いが見て取れた。小祝さんが尾形さんの田んぼへ入って稲をサンプリングし、近くの圃場から拝借した慣行栽培の稲と比較した。鳥海山から流れる水特有の鉄分の影響もあり、昨日見た小祝さんの指導する長野・伊東さんの根ほど白くはないものの、慣行栽培の稲の根とははっきり違う。また、尾形さんの根の方が量が多く、そして長い。昨日の写真からの変貌ぶりに目を見張る結果となった。

参加者のみなさん。稲穂が実る頃が楽しみ!?

左が拝借した隣の圃場の苗。右が秋おこしをし小祝氏が施肥設計した尾形氏の苗

■硫化水素を発生させない土作り

田んぼから帰ったあとは、小祝さんによるまとめの講義。田んぼで発生する硫化水素は稲の根に発育阻害を引き起こす。根が細く量も少なく赤いと、十分な養分が穂へ運ばれず、米の生育に影響がでる。この硫化水素を発生させないため、田んぼに水を張る前にいかに未分解物を減らすかが大きな鍵。この未分解物の代表格は藁。この藁を分解させる時間を得るために、秋に藁を鋤き込むことが必要なのである。

この秋処理のポイントとしては、❶酸素補給のため深耕は厳禁、❷分解ができるように温度の高いタイミングで行なう、❸また藁だけでは炭素率が高すぎるため窒素源の投入も同時に行なう、などをアドバイス。分解を早めるために菌の使用も有効とのこと。一番強いのはあけびについている酵母菌らしく、小祝さんが持参した表で説明が行なわれた。

また、田んぼのpHも重要とのことで「戦後は石灰減らして酸性土壌にしないと窒素が効かなかった。しかし、量はとれるが稲が劣化するし倒伏もする。皆さんは有機堆肥なのでその必要はないので、pH6.5でスタートし6.0で終わることを目指してほしい」。

田植え後の稲を健全に育てる重要なポイントとしては、秋の藁処理をしっかり行ない、春先の土壌分析により必要な肥料(このとき苦土・カルシウム・加里のバランスにも注意)を補充する。そして、「まずは皆さんの圃場で必ず実験区を作ってから全体で試して欲しい」とまとめられた。

参加した生産者からは、事後アンケートの文面だけでなく、「今回はためになった。早速実験区を作ってみたい」と力強い言葉も聞くことができた。来年の秋、稲穂が金色に変わる頃が楽しみだ。

幹事生産者、遊農くらぶのみなさん

プロフィール

武居徹
らでぃっしゅぼーや(株)
農産部仕入課
73年生まれ。97年入社。28歳AB型。大学で水産を専攻していたはずが、現在は農産部で米・雑穀の担当をしている。趣味は野球、釣り!　今の悩みは、米担当で夏場の休日が出張の連続となり渓流釣りに行けないことと、彼女がいないこと。

(※)昨年3月、山形のファーマーズクラブ赤とんぼで行なわれた交流集会の後、小祝さんが指導している長野県の生産者を「是非見学したい!」と尾形さんは、その年の夏仲間3人と夜中車を飛ばして田んぼの見学に。そして秋に藁処理を行ない、土壌分析から施肥設計をしたのです。